

玉章

室生犀星

青空文庫

故郷ふるさとにて保則やすのり様、十一月二十三日の御他界から百日の間、都に通じる松並木の道を
 毎夜参りますうちに、冬は過ぎ春がおとずれ、いまでは、もう、松の花の気はいがするよ
 うになりました。御身おみさまも、なぜ、わたくしがかくも寥さびしい松並木の道をおとずれるか
 について、きつと、奇異な思いを抱かせられることと思いますが、それをあからさまに申
 上げれば、ただ紀ノリスケ介様にお目もじしたいばかりの夜歩きに違いないと申す外はござい
 ません。お亡くなりになられた方にお目にかかるということは変な言葉のようにきこえま
 すけれどそれは何時いつも都からお越しの折に、あれらの松並木の道をおとりになっていた
 ということだけで、わたくしには生きた思いがいたして来るのでございます。かつての紀
 介様のお踏みになった土地や、お目にとまった松並木の松の木や、土手や、小さい丘や、
 涼しい蔭かげなどには、過ぎた日の紀介様のお眼まなこがありありとみひらかれて映うつってまいります。
 あそこまで参れば、わたくしの耳は紀介様のお声をきくことが出来ますし、ご機嫌よ好か
 った日のお笑いごえを耳に入れることもできます。わたくしの耳は松並木にまれば、ひ
 とりであかにあからみ、しずかに物声にきき入ろうとする用意をするようになりました。たんに
 耳ばかりではございませぬ、わたくしの五体があそこではそれぞれの記憶のなかに、手は

手、胸は胸、脇の下までが別々の感じをもとめ、そして別々の思いに耽ふけつてゆくのでございます。ことさらに胸にのこった紀介様のおからだの重みも御身様の前で申し上げるのも何となく気が負ひけるような気になりますけれど、人の美しいちからはどのようなにしても、滅ひびきらないものに思われます。かつて紀介様はいつか何かのまぎれに、ふいにお仰おほせになつたことがございました。人の思いは何百年とか何千年とかいう永い歳月をもただ、一ひ呼吸といきに次の時代の人に移つてあらわれることがあるものだ、まるできのう考えたような新しい思いをそのままに移しかえてくるから妙だ、人間の考えたものの前では、永い歳月などというものは有りえない、よい人間の考えたことは全く今すぐに思いついたことと同じ程度に新しいのだ、と、こういうふうおっしやに仰おほつたことがありました。実際人間は亡くなつても、それを考えるときはすぐきのうお亡くなりになつたとしか思われなくらい近い日ひを考えるようになるものでございます。

こういう毎夜のわたくしの歩みはいつも、松並木のなかばまで参りました時に、きつと一と応立ち停どまつて見るのがつねでございました。それは前のたまとまずさにお示したようにふしぎな一つ家の灯ともしびがもとでございました。どういとう晩にも点とれていない日はなく、そして決つてわたくしが館やかた近くにもどりかけ、灯ともしびにうしろを見せる時分にふつと消えるの

が毎晩の例でございました。保則さま、ご免あそばせ、しまいにはわたくしは御身様があそこにお住みになられているのではないかと、そんなふうにかえることもございました。わたくしの生涯をかけたかたちに添うようにおまもりくださいました御身様が、ただ、故郷をおなじくした、おきな友達であるという理由ばかりで、あのようにな親切におちからをかしていただいたかと思ひますと、そういう思いの外側にきらりと光るものを感じられるのでございます。それは何物であるかという問いよりもきつと御身様のお眼のかがやきがわたくしの胸に残っているためとより外に考えようともございません。

さて、わたくしは或る夜ふしぎな一つ家に立ち寄つて見ましたが、それは何の不思議さもない、普通のお百姓家であつたことを知りました。年老いた媼は普通の土器よりも大きい灯火をかがげていることが、奇異であるとすれば、全く奇異に大きい灯びでございます。わたくしはそれを問ねて見ないあいだは心の落着きをとり入れられませんので、老媼にこう尋ねて見たのでございます。

「卒爾ながら灯びは民家にあるものより大きくはございませんか。」

「お気づきでしたかお姫様、これは夜に都にのぼる旅の衆の心たのみになっているのでございます。しかし夜中じゆう点しているわけではございませんぬ。」

「旅人はよく尋ねて見えまするか。」

「はい、三日に一度ぐらいの割合で道に迷うて尋ねて見えます。しかしさてあなたさまは？」

老媪は息を入れて森とした眼付で彼女にいった。

「あなた様は永い間往還おうかんをゆききしてござったが、あれはおそらく百日のあいだでござりましたな。」

「よくござんじでいられる。」

「あなた様がお館をお出になるのがたそがれでござったゆえ、永い間には、もうお顔までおぼえてしまいました。」

「遠目でよくも顔までお見えになられた。」

「それは毎日の夕方ゆえでございました。もうお出になるころだところこの柱にもたれて見渡していますと、きまつてお館の戸が開かれました。そしてあなた様はその戸を細ほつそりとお立ち出いでになられました。」

「よく見ていてたまわりました。」

「はじめは戸がきしんでそこだけが悪くなっているのではないかと思うくらい、
窮きゆうくつ屈

げに出られるのが気になっていたのでございますが。」

「館を出るときにはいつも悸気どつきがいたして、すぐには、出られないような気になっていたのです。」

「きつとそれは思い詰めていて、きゆうに、その思いつめたものから離れられない証拠かもぞんじません。そしてあなた様は原をよぎって往還に出られるあいだ決まって二度は館の窓をお見上げになる、館の薮しとみは下りていきますのに、それがお気になるのかと、わたくしめはそう眺めていました。川をお渡りになるときに、風はいつもいたずら好きにあなた様のくろがみをなびかせて参ります。それから衣裳をきらきら光らせていきますのが、残んの光に美しく見えてまいります。それより何という数多いご衣裳でございましょう。」

老媪は目にあまる衣裳のうつくしさを、どういったらいいか、まようているくらいであった。実際、彼女は毎夜ごとに衣裳をとりかえ、帯をかえ、袿うちぎをかえたのだった。そうでもしなれば到底着つくせないほどの、撩りょうらん乱らんたる御衣おんぞは、もう着る機会さえもないよな気がしていた。彼女は子供のようにそれを見てもらいたかった。見る人は生きているわけではない、また、実際に見られているわけでもない、しかし、それをそうしなけばいられないところに、彼女の息つくやさしさがあつた。きつと見ていただけのし、きつと、

見てもらえるようにするといふ^{いのり}構^{くわ}めいた心は、すこしも怠けることなく衣裳をとりかえさせたのであった。この心をつきつめたところにあらゆる彼女の用意ある、和歌のようなだよいがあつたのだ。

「わたくしは百日の間に着たような機会が、ふたたびわたくしの衣裳の上にあるとは思われません。」

「ご免あそばせ、わたくしがあなた様の御本心に^{たと}辿りつくまでには三日も四日も考えつづけて、やっとあなた様がお方様のためにそのようにご衣裳をお取りかえになることを知つたのでございます。そして自分でもほつと致したほどでございます。」

「それは^{はず}羞かしいこと、二度と口にすべきことではないかも知れませぬ。」

彼女は誰^{だれ}も知らない夜歩きが、こういう遠くの一つ家から見まもられていることに、^{はに}羞かみと不思議さを感じた。

「それから今ひとつ申し上げたいことがございます。」

「それはいかなる事。」

彼女は面^{おもて}を立てなおした。

「^{おとし}昨年^{おとし}の秋あたりから都から立派なお方様が夕方車を召してお通いになっていたことが

「ございました。」

彼女はからだじゆうが冷たくなるほど驚きに圧せられた。

「あのお方はあなた様の何にあたらせられます。」

「夫にございます。」

「これは恐れ多いことを申し上げました。したが、去年十一月ころからはたりとお姿を見ないようになりましたが、ひそかに、もしやと不吉な考えをわたくしめが持っていたのでございます。」

「十一月の二十三日にご他界になられました。」

彼女は眼をしばたいた。此^{ここ}処^こにおいて紀介を見ていた人があつたのかと、一つ家のももしびにえにしのなかつたとは、いえなかつた。

「わたくしめも、それからあとのあなた様の夜歩きも、百日のおん供養^{くよう}だというふうに拝^かしてました。」

「その願明^{がんあ}けも近いうちに廻^{めぐ}つてまいります。」

「えにしようもの深さと手近いことは、まったく眼にとまらぬほどにございます。都^とからのお方は二度ばかりおたずねがございました。」

「まあ、それは。」

彼女は益々驚きに惹き入れられ、手につめたい汗を感じた。

「一度はあなた様のお館の位置をおたずねになり立ち寄られ、わがつまに当たるものであるがとの仰せにございました。」

「あとの一度は？」

「あとにお尋ねあつたときは出水や近火のあつた折、そちの屋敷にとどめてくれるようにと、ねもごろなお托みでございました。その折にいただいた黄金もいまだにたいせつに所持いたしております。」

彼女は胸のうちに紹介さま、かくも、お心づくしを忝うしていながらいまごろになり気づいた心のぬかりをおゆるしあるように、と、よく細かいことに気づく紀介が、ここまで心をくだいて深い用意をしていてくれたかと、胸もどがころよく緊つてくることを感じた。

「しかし出水もなく近い火の過ちもなかつたかわりに、もう、お姿を拝むことがなくなりました。あのように健やかに亘らせていながら、あえなくなるとは、人のいのちの脆さはかられませぬ。」

「それは何時いつころのことでもございましたらう。」

「昨年の春もやっと三月になったばかりの日にございます。あなた様には何ともわたくしめのこととは、お仰せになりはしませんでしたか。」

「いいえ、少しも。」

彼女は思いあてていった。

「事あらば近い家をたずねて救いを乞こわれた方がよいとだけ、申していたようにおぼえております。」

「それはわたくしめの家を指してそう仰おつしやつたにちがいございません。ここからはお館が近くございますゆえそれに、お方様がお越しになられた夜はあかあかと灯ともびが、西にも東にも点ともれていたようにおぼえております。そして間もなく灯ともびが消えたしばらくの後に、往還ともにおくるまの音がいたしてまいりました。わたくしめは不倅な生涯をおくったものの一入でございましたから、お方様とあなた様のあまりにもお美しいくらしを、ひっそりと胸に抱いてやすすんでいたのでもございます。わたくしに一人の子供もなく、母親になる資格とはございませぬけれど、恐れながら母の持つ、そういういたわりを感じることで、自分もいつもふくよかな睡ねむりにつくことができているのでございます。」

「そのお言葉にはお礼を申しつくせないうらい、忝かたじけない思いがいたします。ご老ろう媪おやうさま、いまから後はえにしなき、わたくしどもではないことを承知あるように。」

「お姫様、それは勿もったい体たいないおことばでございます。」

こうして一つ家の老媪と相知ることができ、永い間頭にあつた一つ家というものを知ることができました。えにしは、何いずこ処こにも宿り、何いずこ処こにもつながりを見せるものに思われま
す、あそこに紀介様がお越しになつたばかりではなく、かげながら後事こうじを托たくされていたと
いうことも、わたくしには、えも言われぬ美しさの本物にふれたような気がいたしてま
います。わたくしは決してふしあわせとか、はかないとか、どうしたらいいかという目標
のないことを申したくありません、申しようもございません、恐らくわすかばかりではあ
りましたけれど、紀介様との生活のこまごまとしたもので、かえつてわずかな間であ
つただけに、一つも取りおとすことがなく、みな、集めてたのしくくくしていたようにお
ぼえます。人は永い間のしやわせを取りとめるには、なかなか艱かん難なんなものが前にも後
にも待ち伏せにしているものでございますから、短い間であつたためにも、いろいろな、
しやわせがおとずれて来たように思われるのであります。それは、それは、しやわせ過ぎ
るわたくしだったかも分りません。

きようこそお話し申し上げようとしながら、つい、また、ほかのことを書いてしまいました。きようこそはと何時いつでも書きかけながら話の本統にふれないでいて、わきみちのこ
とばかり書いているのは、一体、どうしたものでございましょう。別に心でそれを避ける
わけでもありませんのに話はいつでも外それて行ってしまうのです。保則様、いつか、きつ
とお話する機会のあるまでは、たずねないで下さいと申し上げたことも、きようお話し
たそうとしますそれなのでございます。それは紀介様がもうだいぶお悪くなつていて、そ
してそのなかでも大変ご気分のおよろしげに見える或る日のことでもございました。昼下り
のうららかな日のさす寝しん殿でんでいつになく

「山吹やまぶき」

と、お呼びになるお声こゑがきこえて来ました。そのお声はいつもとちがった改まった、い
かにもご用ありげなお言葉に冴さえたところがございました。うろたえて参りますと、紀介
様は晴れやかな、何ひとつ曇つたところのないお顔付でいられました。それはお心もその
ように晴れやかであることに、すぐ、気づくようなお元氣さでございました。

「いつかの若い武士のはなしなんだが、あの人から便りがあるか。」

突然なおたずねだったものでございますから、あるいは、わたくしはその折に顔をあからめたかも分りません。あまりに不意な、あまりにだしぬけでございましたから、故意にそう仰せられるのではないかと、そうも取れるのでございました。

「あれ以来おたよりとは、絶えてございませぬ。」

わたくしは言葉をついでおたずねしないわけには行きませんでした。

「いまごろ何故なにゆえそうおたずねでございます。」

「それについてそなたの気を悪くしない程度で、きいてもらいたいことがある。」

そう仰おっしゃ有る紀介様のお顔にも、依然、少しもみだれた色がうかばないでいて、かえつてお眼はやわらかに澄んで見えていました。

「いかがなことでございましょうか。わたくしに關すること何か……」

「氣にかけてはいけない、少しも氣にかけることではないのだ、ただ、あの武士がいまだに丈夫でいるならば、わが亡き後にそなたの処ところを知らしてやれと申したいのだ。」

「それはまた何故にございます。」

「そなたの身をまもる人がいなければならぬからだ、それには、そなたのしたしい人であれば親身になつて身をまもつてくれぬからだ。」

わたしはこうべを垂れてだまってしまいました。やっと、わたくしの口をついで出る言葉は、ただのひと言に尽きているのでございました。

「そのようなことは再度とおはなしくださいませぬよう、あらためて山吹から申し上げとうございます。」

紀介様は手をふってそんなに神経質になつてくれては、こまると仰有られました。

「決してそなたにやきもちをやいているのではない、よくお聞きあれ、人というものはその終の日に近づいてゆくと、気持が澄んで一点の濁りもないところに、ようように辿りつくものらしいのだ。わたしはいま、恰度、そういう境にいるのだ、そこからお前を見つめていて、何が祈られるかそなたに分るか、何がそなたの生涯をふくよかにするかが分れば、それを選ぶということが自然になされることではないか。」

「それでもわたくしは、そのようなお言葉をお聞きするのがつらうございます。」

「それはそなた自身が心をくるしめるように考え込むからいけないのだ、わしの顔や眼つきをごらん、何一つ邪しいことは考えていない、そなたももつと大きい心になつて聞いてもらわないとこまるのだ。」

「はい。」

「つまりわしは何を眼あてにして死のうとしているのか、それが分つてくれれば有難い、人は死ぬことにすら目標がある、死ぬ奴には死ぬために生きるものがほしくなるのだ、つまりそなたをわしの信じた人につきあわせるといふことだけで、どれだけわしの心が広くはれやかになるか分らない、ただ、そのままのそなたを見る不安をまぬがれることが、わしには必要なのだ、そなたの身をまもるには、若い武士より外に人はいない、ほかにそなたに近づく人がいるという考えを、わしは信じないしそういう考えを^{しりぞ}けたいのだ。」

「はい。」

「あの若い武士をひと眼みたときから、わしの心にはやきもちが起らずに、しずかな友達としてのよしみが感じられた。決して悪い人間ではない、むしろ、よい人間の質を感じた。そなたに近づいているほどの人間にはそれだけの資格がある、それをあの若い武士は智恵や容貌の点からもいしくも持ち合していた。よい人間にはよい人間が近づくという、運命的なものさえ感じられた。世界の何びとよりも、そなたのいろいろな相談事はあの若い武士の胸の内にあるとわかっていいのだ。そなたが故郷人^{ふるさとびと}とか幼な友達とかいう考えからでなくとも、ついに人を選ぶとしたら、わしでなければあの若い武士より外には、人という人は見当らなかつたであろう。」

わたくしはうつ向いたままの、顔をあげることすら出来ませんでした。じつと見つめて
 いる床のうえがきゆうに明るくなつたように見え出して来ました。子供の折に眼をつぶつ
 ていきゆうに開けたときの、ああいう明るい眩まぶしいものさえ感じられて参りました。お
 羞はかしいはなしですけれど、紀介様のしばしば仰わおせになるああいうお言葉には、やはり嫉
 妬まのようなお心が雑まじっていると考えていましたわたくしは、そういう考えがはずかしくて
 ならなかつたのでございましてけれど、それをどう改めるわけにも参りませんでした。ど
 れほど心を正しく引きもどそうといたしましても、邪念は依然わたくしから意地悪く去つ
 てはくれませんでした。

それがどうでございましょう、いま紀介様がこう仰おっし有しゃつていられますあいだに、あま
 りにもはつきりと人間の一等高い心というもののありかが、それが病んでいる人にとつて
 病んでいるという大変に悲しいおしごとの数々が、だんだんに重なり積み上つて遂ついにきよ
 うの紀介様のお言葉にあらわれたと申していいような気がします。ここまで紀介様は平然
 と歩いて来られ、そのために少しもお心をいためはなさらなかつたことさえ、わたくしに
 は人の心の偉さが感じられてまいりました。かえつてわたくしにそれをお明かしになるこ
 とが、御気苦勞があつたように思われます。それはわたくしの至らなかつたことばかりで

なく、わたくしはまだ紀介様のような愛情の高さにまで及びつけないでいたからでござい
ます。山々に入りお薬をとつていたわたくしのあるかないかの苦心よりも、紀介様はお床
のうえでわたくしの十倍も二十倍も高いところにお上りになり、わたくしを見つめていら
れたのでございしました。

「山吹、わしのいったことがよく分つたか。」

わたくしは何の躊躇ためらいもなく、手をつけて申し上げました。

「よく分りましてございます。」

「あの武士はいま何処どこにいるのか。」

「故郷にいらつしやるように思われます。」

「川べりの何とかいつたな。」

「立田たつたがわ川でございします。」

「あそこの景色はいまも眼にあるね、景色というものは見たときよりも、思い出すと美
い。」

紀介様のお顔はやはり平明な落着きを見せていられ、わたくしに言いたいことを仰おっしゃ有
つたあとの満足さでかがやいていられました。およそ立派という言葉は、こういう時にそ

の意味をあらわしてくるような気がいたします。

保則様、きようは思い切つて申し上げることも、心置きなくおつたいいたしました。もう何も申し上げることもございません、いつもお越しくださるようお手紙をいただきながらそれのお返事もいたさなかつたのもこれらの気持をおあかししたあとで書こうと考えていたのでございます。もしおたずねくださるようなれば、いつにてもお越しくださいます、むかしのような山吹が一人いるきりでございます、むかしも今も、ここまで来てみれば、どれだけでも變つていようとは思われませんが、變つていのはかえつてわたくしより外の人かも知りません、外の人も變つていないのかも知れませんが、ただ、人間はその気持のうごきによつて、變る變らないという二つのことがらが決るのでございましょう。もう、松並木には春の日がうららかに当り、皓々たる音すら冬ほどの厳しさがなくなりました。土手、小さい丘、原、小径、こみち、そういうきれぎれの景色にすら、春はゆたかにしるされていきます。どうぞ、遠慮なくお越しくださいます、一つ家へも、ひと館のうちのお庭にも、かつての山吹がごあんない申しあげ、かたわら故郷のおたよりも聞きたいと、そのみを念じ上げまいらせます。

青空文庫情報

底本：「犀星王朝小品集」岩波文庫、岩波書店

1984（昭和59）年3月16日第1刷発行

2001（平成13）年1月16日第6刷発行

底本の親本：「室生犀星全王朝物語 下」作品社

1982（昭和57）年6月

初出：「婦人画報」

1946（昭和21）年3月号

※表題は底本では、「玉章《たまざさ》」となっています。

※初出時の表題は「春御衣《はるおんぞ》」です。

入力：日根敏晶

校正：門田裕志

2014年3月7日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

玉章

室生犀星

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>